

一人の人間が 一生の間に 直接 経験体験できることには限度がある

読書は 人の生き方を学ぶ 良い方法であり

間接的な経験体験を 豊富にする

私たちは、毎日、誰かと接触を持って生活をしています。しかし、どれくらいの人と交流しているのかを省みると、その数には限りがあり、そんなに多くの人とは交わっていないことに気が付きます。

特に、年齢が若いときには、接触できる人の範囲も人間的な交わりも同類同質で狭いものになっています。

また、職業人になると、特別な職業を除いては、同様な傾向になることも否定できません。たまたま機会があつて、異種の世界の人と接して自分が所属している世界と異なった考え方をすることはありますが、その機会も多くはありません。

本を読むことの意義は、物語として述べられている作者の意図や作品中の主人公と関係人物の生き方を間接的な経験体験として知ることができることです。

読者は、読者の見方や考え方で、物語を読み取り、その内容を斟酌(しんしゃく)します。その斟酌が大切で、自分の見方・考え方と比較検討し、さまざまな感情が働き、そこから新しい見方と考え方が生まれることが少なくありません。

これは、自分が直接経験体験することではありませんが、本を通して得た新しい経験体験となるものです。

この経験体験は、若いときにできるだけ数多くした方が望ましいと思っています。頭の中が、柔らかい状態であればあるほど、自分のものとしていけるからです。理解も順応もしやすいからです。

選ぶ本の種類については、人によって好みもありますが、できるだけ広範囲の分野の方が望ましいと思います。

読書が進めば、自然と選ぶ分野が決まってきます。一度に、たくさん読もうとすると長続きしません。

初めは、興味のあるものから、そして、深みのあるものへと進むことが良いかと思っています。

